日本書紀傳 卅一卷 十五

和書 一〇五二二號

百三十七

内閣文庫
番號 和 10522
冊數 156 (146)
函號 特 85 1

国立公文書館
National Archives of Japan

め置せさせ給へるが故ある事申すも更なるか大倭
神社注進狀か旧記曰大倭神社在大和国山邊郡大倭
邑蓋出雲杵築大社之別宮也と有ふ就ても其此思合
す可き事ある多うりける但其社の御正体の瑞八尺瓊ハ大己貴神の八十隈ふ
隠坐す時ふ置し給へるう天神の御許ふ傳ハり其よ
り皇御孫尊ふ授進らせられて崇神天皇の大御代ふ
でハ其同殿の内ふ御在し坐けるを右の大倭神社ふ
辺し鎮奉らせ給へる由已ふ傳サ九巻十丁ふ委
しく注せるが如し然れば此ハ其神体ふ係ハらずし
て其神の御上を以て杵築大社の別宮とふ申せるふ
り思混ふ
可うらずす

于時高皇産靈尊以眞床追衾

内一二六八三號

覆於皇孫天津彦彦火瓊瓊杵尊使降之皇孫乃離天磐座天磐座。此云阿麻能以斐矩羅。且排分天八重雲稜威之道別道別而天降於日向襲之高千穂峯也

平國の大御政已ゐ事託させ御在ーー坐て今天神御子を天降ーー奉ーーせ給ふ事の次第をーーも此ゐハ例の甚く事略てゐむ書させ給へるを此正書一書とを一ゐーー他書ゐ取て其運ひを正ーー知ずハ亦得ゐむ有おじうゆける偖上ナニゐ注るゞ如ーー此時ゐ天降ーー奉ーーせ給ハむと為て種ーーの大御政を行ハせ給へるハ天忍穂耳尊の御為ゐーーて瓊ーーー坐ざる間るゝを此正書ゐハ凡て皇孫と書ーーて瓊ーー杵尊の御事と為る由ハ天忍穂耳尊ハ天降ーーせ御在ーー坐すて止ぬるゞ故ゐれでも実ゐハ皇祖天神よ

り天忍穂耳尊ハ天津日継を授奉らせ給ひ然して其
天忍穂耳尊より瓊〻杵尊ハ傳進らせ奉給へる慥か
る證共有て次〻ハ辨ふるが如し然れば此御天降の
件を読べき状ハしも第一ノ一書ハ天照太神勅曰若然
者當降吾児矣且將降間皇孫已生号曰天津彦〻火瓊
〻杵尊時有奏曰欲以此皇孫代降之有を古事記ハも
亦天照太御神高木神之命以詔太子正勝吾勝〻速日
天忍穂耳命今平訖葦原中国之白故隨言依賜降坐而
知省亦其太子正勝吾勝〻速日天忍穂耳命答白僕者
將降裝束之間子生出名天迩岐志國迩岐志天津日高

日子番能迩〻藝命此子應降也此御子者御合高木神
之女萬幡豊秋津師比賣命生子天火明命次日子番能
迩〻藝命二柱也〻有〻有て此瓊〻杵尊を以て代て降
給ハむと云事ハ其天忍穂耳尊の申し請せ給ふ所
ハ依るが如此く二柱御在し坐る中ハ其長子の天火
明命を除て次子の瓊〻杵尊を〻撰ハせ給へるも其
尊の御業ありければ万ハ其御計ひ有り御事申
すも更あり然して第二ノ一書ハ皇祖天神より天忍
穂耳尊ハ種〻の御事依の御事共託て其天降らせ給
へる御事を記されなるハ時居於虚天而生児号天津

彦火瓊〻杵尊因欲以此皇孫代親而降故以天児屋命
太玉命及諸部神等悉皆相授且服御之物一依前授然
後天忍穂耳尊復還於天又所見たる此虚天ゐて御子
の生坐し事ハ然も有べし然りとて其私ゐ代て天降
し給ハむ事ハ(の御在し坐)有べきゐ非ず皇祖天神ゐ奏して其御
許を請奉らせ給ハず為ていハ(出来させ給ひ難き御事ありけれ)此も虚天より還上らせ
御在し坐て後の事ゐて此も共ゐ皇祖天神の御計ひ
を仰奉らせ給へるゐりけり此事一應ゐてハ定め難
べし此ハ唯(天)忍穂耳尊を天降させ給ふ御為ゐ皇祖天
神の万の事共をバ定め行ハせ給へるのみを雑ふる
事と見る可し 偖第二一書 古事記ゐハ此平国の以前ゐ天忍

穂耳尊の天降らせ御在し坐ける御事有き然るゐ第
二一書ゐハ其平国より以上の事ハ化て略うれたり
けれバ右(ゐ引る文)ハ其先の御天降と後の御天降との事の一
ゐ成れる傳ゐて則以高皇産霊尊之女号萬幡姫配天
忍穂耳尊為妃降之故時居於虚天而生児号天津彦火
瓊〻杵尊と有ハ先度の事ゐて第一一書ゐ既而天照
大神以思兼神妹萬幡豊秋津姫命配正哉吾勝〻速日
天忍穂耳尊為妃全降之於葦原中国是時勝速日天忍
穂耳尊立于天浮橋而臨睨之曰(中略)乃更還登具陳不降
之狀と有て古事記の文も此趣ゐ同し然れバ居於虚

ムうと思ふ其ハ磐窟う時の天糠戸神の御事ハ一在けれバ混ひたる傳

天糠

天而生児と有ハ決めて其時の御事おめけゝし然るを其第一ノ一書ハ且将降間皇孫已生と書され古事記ハも僕者将降襲束之間子生出と有る将降とハ先度ハ此国の未平る状を臨視坐て還登ゝせ給ひし後ハ其平国の御事御在一坐けれバ其だハ事訖たゝむハ何時ハても天降り坐むと為させ給へる故ハ此御天降の際ハ當りてと云ハも非ず廣く其程の事を申させ給へるある可けれバ然のゝ抱るなゞきハ似たり其瓊々杵尊の虚天ハ一て生坐一御事ある時ハ此ハも因欲以此皇孫一代親而降と有ハ此時ハ當りて

（ハて生坐る御子ハ天忍穂耳命ハ）

（天火明命ハ）

（直ハ降ゝせ給ひしゝどと）

（御天降ハ）

（生坐るハ故ハ）

衍

ムうと思ふ其ハ磐窟う時の天糠戸神の御事ハ一在けれバ混ひたる傳

（結ハざる以前の御子ある故ハハ皇太子ハハ立ヒ）

ムう天統をハ受させ給ハず次ハ生坐瓊々杵尊う割ハて生出させ御在一坐一ゝバ正しき天亂ハハ御在一坐ける若て

ムうり此子應降世と有ハ皇太神の大命ハ此豊葦原水穂国者汝所知国言依賜故隨命以可天降と有も既見ハ其言依賜ハ御父天忍穂耳より瓊々杵尊ハ御事依の御在一坐けるある皇太神より其御父の命の隨ハ可天降と詔給へる義ある事傳世二百三十ハ注せるグ如一又其ハ第二ノ

然奏一請せ給ふ可き御事あり然れバ故以天児屋命太玉命及諸部神等悉皆相授且服御之物一依前授と云ハ第一ノ一書古事記等ハ其瓊々杵尊ハ種々の御事依の御事ハ有を此一書の如くハ天忍穂耳尊より御讓位の表立たる御政御在一坐けるありけり其次ハ然後天忍穂耳尊復還於天と云ハ右ハも云る如く此傳ハ先後二度の事の一ハ成れるありけれバ其文勢ハ引れて如此く結めざる時ハ其文落著然れバ立復りざるゞ故ハ地より書るハれバ抱ゝず然れバ立復りて天忍穂耳尊の先ハ天降ゝせ御在一坐ける御時ハ御政を思ふハ後ハ瓊々杵尊の御事ハ皆已ハ其時ハ在一事且服御之物一依前授と有ハて知ゝれたり故

（御在一坐ける趣ある故ハ古事記ハ天忍穂耳尊ハ）

（直ハきも）

（皇祖天神より）

古事記御天降段の初め天照大御神之命以豊葦原之千秋長五百秋之水穂国者我御子正勝吾勝二速日天忍穂耳命之所知国言依賜而天降也と有る此御時み其天児屋命太玉神及諸部神をバ授させ給ひ服御の御物をも皆具させ給へるい其時ハ虚天より還上〜(瓊〻杵尊の)せ給へる故ゃ古書何れも御天降の時(の事)寶ふのを傳ハれゆし者あり今引上て試るゆ右の文ゆ續きてゃ故天照大神乃賜天津彦〻火瓊〻杵尊八坂瓊曲玉及八咫鏡草薙劔三種宝物諸書是時天照大神手持宝鏡授天忍穂耳尊而祝之曰吾児視此宝鏡當猶視吾可與

同床共殿以為斎鏡(茅二一書)因勅皇祖孫曰葦原千五百秋之瑞穂国是吾子孫可王之地也宜尓皇孫就而治焉行矣宝祚之隆當與天壤無窮者矣(茅一一書後)又以中臣上祖天児屋命忌部上祖太玉命猿女上祖天鈿女命鏡作上祖石凝姥命玉作上祖玉屋命凡五部神使配侍焉(同書前)高皇産霊尊因勅曰吾則起樹天津神籬及天津磐境當為吾孫奉斎矣汝天児屋命太玉命宜持天津神籬降於葦原中国亦為吾孫奉斎矣(中略)惟尓二神亦同侍殿内善為防護又勅曰以吾高天原所御斎庭之穂亦當御於吾児(茅二一書)宜太玉命率諸部神供奉其職如天上儀(古語拾遺)〻

有るゞ如此く後度に有る大抵の御事共は其先度に
已に天忍穂耳尊の皇祖天神より受奉らせ給へり
御事ありければ後に其御子を代て天降させ給ふ
為ては其尊より瓊々杵尊に授奉らせ給ふ可き者か
（事理に於て違ふべからざる）
りゝ　右は第二一書に曰く天児屋命太玉命及諸部神等悉皆相授且服御
之物一依前授と有を立て其始天忍穂耳尊の天降せ御在し坐ける時の較略をば如此有べき者と明
め奉れる説あり　若て右に引る古事記に其天忍穂耳尊の御
子事を天火明命次日子番能邇々芸命と有て其御兄か
る天火明命に天津日継を授奉らせ給はずして其御
弟の瓊々杵尊を以て天津高御座に令坐奉らせ給へ

るは如何と云に此天火明命は其時に御父天忍穂耳
尊と共に還上らせ給はずして直に天降らせ給へる
者と所見（ゆめの）たり　天神本紀に此命の（御）天降に供奉三十二
神五部人五部造天物部船長などを師（帥）て降給へる由
に云るは其天忍穂耳尊の供奉と此饒速日命の供奉
とを分たず混（ヒトツ）同にして傳たり　者と所見たり其は
上十五に注るが如く丹後風土記に當国者往昔天火
明命等降臨之地也（下略）と見え其伽佐郡志樂郷の下に
往昔少彦名命大穴持命當（下）巡覧所治天下時而悉巡行
於此国畢更到坐于高志國之時召天火明神詔汝命者

可領知此国火明命大歡喜と所見たれば其天忍穂耳
尊の始て天降らせ給ハむと為しハ未だ彦名神の常
世郷ゟ渡り御在し坐さめし以前の御事ゟて在しゟ
りけり然るゟ十種神宝の御事ゟ由有る事の其記ゟ
ハ所見ざるゟ此時ゟハ彼斎庭之穂を携さへ豊宇氣
大神の御霊を供奉らせ給ひ其后天道日女命と共ゟ
五穀及桑蚕の種を天下ゟ弘めさせ給ふ御為ゟて其
後ゟ瓊〻杵尊の御天降ゟ引曳〻せ給へるを今度ハ
亦天祖の詔命を以て十種神宝を令持て天降させ給
へるゟてある可し古事記白檮原宮段ある其饒速日

命の御言ゟ聞天神御子天降坐故追参降来即以天津
瑞以仕奉也と有を以て曉る可し其天神本紀ゟ饒速
日命稟天神御祖詔乗天磐船而天降坐於河内国河上
哮峯則迂坐於大倭国鳥見白庭山と有ハ此時の御事
ゟり是瓊〻杵尊の御兄ゟハ坐せども天津日継を受
奉らせ給ハざる所以ゟり然れども天神御子ゟて渡
らせ給へるゟ故ゟ中洲ゟて大君の如く傳(侍)られて御
在し坐しゟりけり故神武天皇戊午年御紀ゟ時長髓
彦乃遣行人言於天皇曰嘗有天神之子乗天磐船自天
降止号曰櫛玉饒速日命是要吾妹(妹)三炊屋媛遂有息兒

名曰可美真手命故吾以饒速日命為君而奉焉あると云
程の事ハ有しかり其長髓彦の出自今此を知べ
三炊屋媛を娶せ給へるを思へば並しの人ハ非
トうし故考るハ陸奥話記と云物ハ云々宇摩志
麻治命神武天皇と十余年相戰ふ安日長髓の兄弟宇
摩志麻治命ハ挺ぶ終ハ天皇勝給ふ長髓ハ天皇の
御兄を討たる故ハ誅せらる安日ハ東北ハ追放れ
卒度濱安東浦を領すと云ことハ有ハ其卒度
濱と云ハ齊明天皇四年御紀ハ謂内る津輕ある然
て其時の道臣命哥ハ愛彌詩烏と詠給へるハ即蝦夷
と云事あれば其放たれし所以を以て其名を称せ
る可し偖出雲臣家譜ハ天穂日命子天夷鳥命子伊佐
我命子津狩命と有り然るハ此御世ハ天日別命の征
伐として向給へる伊勢津彦ハ上七百四十丁櫛ハ玉
神の條ハ云るが如く其伊佐我命の子なるべき思ふ
ハ合せて見れば安日と云ハ津狩命の事ある可き
津輕の地名大ハ相離るゆゑ心ちす然る時ハ長髓
彦三炊屋媛等ハ天穂日命ハ曾孫ハ當る可くや又

右の安東浦と云も天孫本紀ハ宇摩志麻治命の子味
饒田命阿乃連等祖と有ハ此阿乃ハ大和河内共ハ在
る地名あれども由有り又其弟彦湯支命條ハ出雲色
多利能烏と見え其子ハ出雲醜大臣命と云有り又
神名式大和国ハ山辺郡石上坐布留御魂神社名神大月
次相嘗新嘗と有ハ出雲達雄神社と云有て其屬社と
有ハ物部氏と出雲臣とハ
甚近き縁有る狀ある是ハ
右の如く天忍穂命ハ
先ハ天降らせ給へり御時ハ紀記共ハ在ゆる瓊
杵尊の御天降の度ハ在つる故事を係て見て今度其
瓊ニ杵尊の御天降の御事ハ就て事実を正し考て云
く茅一ハハ三種神宝を進らせ給へる御事ハ第一
一書ハ故天照大神乃賜天津彦ニ火瓊ニ杵尊ハ坂瓊
曲玉及八咫鏡草薙劔と有る是其始ハ在べき事ハ

如何とおれハ大殿祭詞ハ皇御孫之命乎天津高御座
尓坐氐天津璽乃鏡劔乎捧持賜天言壽宣志久皇我宇都
御子皇御孫之命此乃天津高御座尓坐氐天津日嗣乎
万千秋乃長秋尓云々と有て国譲の大命を詔給ハむ
とて先天津璽を奉り世給へれバ有りけめとあるべず
古の作法にて如此ハて其ハ古事記ハ三貴子殷
ハ即其其頸珠之玉緒毋由良迦取由良迦志而賜天照
太御神詔而記云汝命者所知高天原矣事依而賜也と見
元又国作の御依の件ハ遥望呼謂大穴牟遅神曰其汝
所持之生大刀生弓矢以而汝庶兄弟者追伏坂之御尾

亦撥河之瀬而意礼為大国主神尓為宇都志国玉神云と
と所見たるおゞ何れも其表物を先渡し奉りて後ハ
其御事依の御事を仰傳させ給ふ定格なるを以ありし
但右の大殿祭詞ハ鏡劔と有ハ故有る事ハて瓊の下方ハ
回して瑞八尺瓊能御吹伎乃五百都御統乃玉尓ハ
云文有ハ此時の玉ある事予已ハ其講義ハ已ハ注
せるゞ如し然る時ハ右の明文有と共ハ其も三種神
宝の説あるを古語拾遺ハ即以八咫鏡及草薙劔二種
神宝授賜皇孫永為天璽所謂神璽矛玉自從と有ハ忌
部氏の私説ハて右の文を読損ひたり者ありけハ其正

三種ある可き證ハ已ハ傳十九巻二百七十八丁ハ委
〻注せれバ今云限ハ非ず神皇正統記ハ此ハ依て
誤らせ給へるを平田史ハも其任ハ取れる然〻て其
ハ何ハ就ても奇僻を好む例の心ハ出たり
鏡ハ天照太神劔ハ素戔嗚尊の御霊ハて瓊ハ天下を
所知食させ給ふ御璽と為て授奉らせ給へるあり
り其鏡ハ就ての大命ハ第二一書及古語拾遺ハ是時
天照太神手持宝鏡授天忍穂耳尊而祝之曰吾児視此
宝鏡當猶視吾可與同床共殿以為齋鏡と有る是あり
但此ハ天忍穂耳尊と有ハ右八百三十四丁ハ注るが如く先
の御天降の時ハ已〻有〻傳の此ハ出たるあれバ然
のミ泥む可きハ非ず古語拾遺ハ瓊〻杵尊の此時

の事と為て右の文を挙たるを以知べきあり然〻て
古事記ハ於是副賜其遠岐斯八尺勾璁鏡及草那藝
劔亦常世思金神手力男神天石門別神而詔者此之鏡
者專為我御魂而如拜伊都岐奉下略と見へ草薙劔の御
事ハ〻も傳廿三百八十四丁ハ注るが如く此ハ素戔嗚大
神より天照太神ハ奉らせ給へれバ本より皇太神の
御物ハ有れども天神御子ハ御璽と為て賜ハ〻ハ
可き御心を含させ給へる御物あり けれバ專素戔嗚
大神の御霊ハ坐り次ハ瓊ハ〻も天下所知食す可き
大御璽ハ賜ハせたる可き由傳八廿二百三十四丁ハ委曲ハ注るが如〻

神皇系圖と云物ハ此時の御事とて天照太神誓曰吾
日太子如八坂瓊之勾以曲妙御宇且如白銅鏡以分明
看行山川海原乃提神劔平天下焉と所見たるハ仲哀
天皇八年御紀ハ所見たる伊覩縣主五十迹手ガ此三
種の宝をハ獻れる時ハ奏せめし語ハ依て杜撰せる
者と先ハハ思捨たりしうども今思へバ此時の御事
依ハ起りて古の大礼ハ此三種宝物を擎げて然称
申せる例とハ所見たり此異説ハ駿河風土記ハ載た
天孫瓊々杵尊欲為豐葦原中国神君既欲天降之時左
御手持携八坂瓊之曲玉右御手携天叢雲劔胸與腹之
間當中八咫鏡神祝曰視吾如視此三種之宝器
倍正又同床共殿大殿氏麻志止自此天嗣不絶以此三種

之宝被奉持之云々云事見えたり此鏡をハ御紀
古語拾遺等ハハ御手ハ捧持せ給へる趣なるを胸腹
の間ハ中させ給へる事珍々し 猶其大御鏡ハ仇て三面猶其外ハも
供奉り御鏡御在し坐し又日子も副せ給へり古語拾
遺ハ子玉自従と有る子ハ八千戈神の御ハて上ハ謂
ハる廣子是なり玉ハ大國魂神の御ハて茅二一書ハ
大己貴神の被瑞之八坂瓊而長隱者矣と有る此事ハ
るを古語拾遺ハ八坂瓊之曲玉を一ハし大殿祭詞の
文義ハ妙有を知さりし故ハ此の三種神宝をも二種
神宝ハ改ハて為し事天窪ハ對奉りて甚可畏き御事
ある故ハ予常ハ其を忌部氏の私説なりとハ云なり

偖其八三面の御鏡と申すハ傳十九 三百二十六十ハ注一丁
るが如く一鏡ハ天懸太神と申す即右ハ謂ゆる宮鏡
是ハて伊勢神宮の御あり一鏡ハ国懸太神と申す紀
伊国日前宮の御是あり一鏡ハ此を眞経津鏡と云ふ
即伊勢外宮の御ある由大倭本記ハ所見たるが如し
此外ハし荒祭宮多賀宮の御も眞経津鏡ハ御在し坐
て共ハ此時ハ副て天降させ御在し坐る趣ハて仇て
五面の大御鏡あむ御在し坐ける次ハ宝鏡開始章第
一ノ一書ハ謂ゆる日矛ハ其正書ハ茅纏之矛と云ひ古
語拾遺ハい此を著釈之矛と云る同物あるが其ハ國

懸宮の御是ある由傳二十七十ハ注一丁るが如し然して
其矛ハ著たる釈ハ大倭本記ハ子鈴と有て神名式ハ
大和國城上郡巻向坐若御魂神社大日次相の御ハて
渡らせ給ふ大倭御事傳十六三百六十九丁ハ注せるを以て
暁る可き者あり然れが天神御子ハ授奉らせ給へる
御璽の御物の主らしきハ右等ハ類ハて猶其外ハも
石戸開の時の御物ハ悉ハ此御時ハ授け奉らせ御事
と所見たり然るハ神宮の書共ハ皇太神の相殿神二
幡豊秋津姫命を劔座と有り然して世ハ傳ハる神樂
の起ハ其時ハ在る事あるハ神樂採物ハ弓有り劔有
り又度會宮の相殿神三座の大一座天津彦彦火瓊々
杵尊形鏡座と有ハ末其時ハ生生ざりけれが此のも

ハ其後ハ造奉るとも見奉る可し次ハ天兒屋命を筑
紫ゝ云ハ神楽の筋拍子なる可く太玉命を玉座ゝ云
るなゞも其時の御物なゝむを然のこハ義歟しけれ
バ傳世二巻ハ百六十一下ハ委しく注し奉りてむゝ
す第二のハ宝祚を賀奉ゝせ給へる大御命を右の三
種神宝を奉ゝせ給へるハ就て仰給へるなり此第一ノ
一書ハ因勅皇孫曰葦原千五百秋之瑞穂国是吾子孫
可王之地也宜ハ皇孫就而治焉行矣宝祚之隆當與天
壤者矣無窮者矣と所見たる是なり釈ハ今此文者天
照太神授三種宝物於皇孫天津彦ニ火瓊ニ杵尊奉天
降之勅宣也ゝ見え其宝祚之隆ゝを如大倭本記初
天地本紀等ハ文者子孫ゝ千ゝ萬ゝ云ゝ有り斯

ハハ是吾子孫云ゝの文右の二書ハ是吾子孫千
千萬萬可王之地也ゝ有ハ可し神皇正統記ハ天地
も昔ハ不變日月も光を不改況や三種神器見在ー給
へり窮り不可有ハ我国を傳ふる宝祚なり仰ぎて尊
ゝ奉る可きハ日嗣を承賜ふ君ハなむ御在ー坐す」ゝ
書ー給へるハ右の大命の義を説し奉られたるゞ如
ー故大殿祭詞ハ高天原ハ神留坐須皇親神魯企神魯
美之命以氏皇御孫之命子天津高御座ハ坐氏云ゝ宣
志久皇我宇都御ハ子皇御孫之命此乃天津高御座ハ坐
氏天津日嗣子万千秋乃長秋ハ大八洲豊葦原瑞穂之

国宇安国止平気久所知食止言依奉賜比氐々有も右の御
意味あるか其かハ其天津日継所知食す皇大宮の御
事を係て言壽宣給へるあり続紀第一詔か高天原尓
事始而遠天皇祖御世中今至万豆天皇御子之阿礼坐
弁弥継ニ尓大八島所知次止天都神乃御子隨母天坐
神之依之奉之隨聞着来此天津日嗣高御座之業止云
ニ第五詔か皇親神魯岐神魯美命吾孫将知食国天下
止與佐斯奉志麻尓と高天原尓事波自米而四方食
国天下乃政宇第十四詔か皇親神魯伎神魯美命以吾
孫乃命乃所知食国天下止言依奉乃隨遠皇祖御世始

而天皇御世ふと聞着國来食国天川日嗣高御座乃業
止奈母隨神所念行佐久止勅第十九詔か皇親神魯岐神魯
弥命乃定賜来流天日嗣高御座次宇第廿三詔か皇親
神魯弁神魯美命吾孫知食国天下止事依奉乃任尓云
ニかと有も右の天壤無窮の神勅の御旨を述させ給
へる者あり万葉二巻柿本人丸作哥か天地初時之久
堅之天河原尓八百万千万神之神集ゝ座
而神分ニ之時尓天照日女之命天宇波所知食登葦原
乃水穂之国宇天地之依相之極所知行神之命等云ゝ
と有も右の意味をなしたる者あり第三か供奉の神等を副奉ゝせ給
へるあり第一一書か又以中臣上祖天児屋命忌部上
祖太玉命猿女上祖天鈿女命鏡作上祖石凝姥命玉作

△取持前事為政と有る共御事ハ

△又古語拾遺ハ宜太玉命率諸部神供奉其職如天上儀と有も此時ハ已ハ在し大命ハて右等の事共

上祖玉屋命代五部神使配侍為と有る此御事古事記ハも尓天児屋命布刀玉命天宇受賣命伊斯許理度賣命玉祖命并五伴緒矣支加而天降也中略故其天児屋命者中臣連等之祖布刀玉命者忌部首等之祖天宇受賣命者猿女君等之祖伊斯許理度賣命者鏡作連等之祖玉祖命者玉作連等之祖と所見たる何れ石門開の御時ハ御功用有し神等を倍従へ奉り世給ふ事決めて所以有べし此第二ノ一書ハ後勅天児屋命太玉命惟尓二神亦同侍殿内善為防護と有も次ハ故以天児屋命太玉命及諸部神悉皆相授と見え如ての御事ハ尓就ての御事ハ

又別ハ次思金神者△

ハ尓天忍穂耳尊の供奉の神等ありし を此

杵

り攫二杵尊の御供ハ令仕奉給へる由あり然れハ其諸部神と云ハ右の五部神ハ更なり天神本紀ハ饒速日命の供奉と為ハ誤なれとも其天御降の時ハ令三十二神並為防衛天降供奉と有る中ハ右の五部神ハ其中ハ抜り其心得ぬ神名も交れるハ其神名の逸して傳ハらぬハ有めれ倭姫命世記ハ伴神天児屋根命掌解除太玉命捧青和幣白和幣并天宇羅雲命取太玉串天三十二神前後に相副従云々所見ハ然る御事も御在し坐るけり其次ハ副五部人為従天降供奉云と船長同共率領梶

取等天降供奉と有るハ何れの天忍穂耳尊瓊々杵尊等の御天降毎に在り御事と所見なり但右の五部人の次に五部造為伴領率天物部供奉云々天物部等二十五部人同帯兵杖天降供奉云々と有るハ如何にも饒速日命の供奉ある可くして其ハ此度ハ無に有る可し其ハ神武天皇戊午年御紀に饒速日命の帥其衆而歸順焉と有る其衆ハ天物部ある由已に古来説有り

第四に八天津神籬の御事

あり第二一書に高皇産霊尊因勅曰吾則起樹天津神籬及天津磐境當為吾孫奉斎焉乃使太玉命宜持天津神籬降於葦原中国亦為吾孫奉斎焉と見えたる是等の事共古語拾遺に八于時天祖天照大神高皇産霊尊の勅命に係て其橿原朝段に爰仰従皇天二祖之詔建

樹神籬所謂高皇産霊神皇産霊生産霊生産霊足産霊大宮賣神事代主神御膳神巳上今御巫樹磐間戸神豐磐間戸神巳上今御門所奉斎也生島是大八洲之霊今巫所奉斎也生島巫所奉斎也坐摩是大宮地之霊今坐摩巫所奉斎也御巫等祭神廿三座並大月次新嘗と有る神社を皇宮の内に斎奉る始めなるが獨右等の神等に限るに非ず天神地祇の社々を定めて祀奉らせ給ふ正々に其起ある證ハ祈年月次等祭詞に高天原に神留坐皇睦神漏伎命神漏弥命以天社国社登称辞竟奉皇神等能前に白久云々と有ハ右の皇天二祖の詔命を奉て謂ゆる神籬

魂留

を建樹て天神を斎鎮めさせ給へる御事是あり其辞
別の大御巫能辞竟奉皇神等能前尓白久云々故皇吾
睦神漏伎命神漏弥命登皇御孫命能宇豆乃幣帛乎称
辞竟奉久登宣々有ハ其本文の結と為る所ゆて皇祖天
神の詔命を奉て今皇御孫尊より其祈年月次祭の大
御祭を仕奉らせ給ふ申あり又其太神宮詞ゆも故皇
吾睦神漏伎神漏弥命登宇事物頭根衝波氐皇御孫命
能宇豆乃幣帛乎称辞竟奉久登宣々有も右ゆ同じき事
類史ゆ右の第二一書の文を伊勢太神宮條の首ゆ收
られたるハ然る事ゆて崇神天皇六年御紀ゆ故以天

照太神託豊鍬入姫命祭於倭笠縫邑仍立磯堅城神籬
神籬此云ヒモロギ有り此を以て右の天津神籬の御事ハ
も謂ゆる皇祖天神を始奉り天社国社と皇神等を斎
奉らせ給ふ事の起り祈年月次新嘗等の神事の始ゆ
る事を知へき者あり又第二一書ゆ即以紀伊国忌部
遠祖手置帆負神定為作笠者彦狭知神為作盾者天目
一箇神為作金者天日鷲神為作木綿者櫛明玉神為作
玉者乃使太玉命以弱肩被太手襁而代御手以祭此神
者始起於此矣且天児屋命主神事之宗源者也故以偉
以太占之卜事而奉仕焉と所見たる此文右の天津神

大殿御門大祝鎮火鄭長等の祭事も皆此時に定めて行ふし給へる御事なれども中にも重きは四箇の大祭なるにて

籬の件より上方に在て大物主神のことに係れる事の如きを上七百二十に注るが如く主として大己貴神を天日隅宮に鎮奉り一時の事なれども彼石戸開の時よりの例と為て各其職掌の神等に坐せば此神籬の御霊に就て上件の皇神等は更なり大己貴神大物主神大国魂神を始て為て謂ゆる天社国社の神事に仕奉しめ給へる由なり四時祭式を見るに祈年六月十二月に次十一月新嘗等の祭祀の事に當りて猶以下の幣物を諸社に頒たれて中臣は祝詞を宣り忌部は幣帛を頒つなど神代の古儀を傳させ給へるなど尊と

とも何とも申さむは中にある御事にて此は神社を建て天神地祇を斎鎮めさせ給ふ大御政にして天下の大事此に過たるは無くなる有ける寛平四五年の格に二月祈年六月十二月に次十一月新嘗祭等者国家之大事也欲令不絶時令順度云々と有が如く天下を統御めさせ給ふ御上に斯計の重事御在坐ざりけり第五に は斎庭之穂の御事是なり第二の書に天照大神又勅曰以吾高天原所御斎庭之穂亦當御於吾児と所見たり古記拾遺にも此文有を斎庭之穂の下に是稲種也と云ふに注有り古事記に は右の稲穂の事無して次登由宇氐神此者坐外宮之度相神者也と見えて御霊の御事を書されたるが其御形は右八百四十一丁に注し奉れる畏所三面の

御鏡の中ハ一所眞形長六寸許と天德御記ハ謂ゆる
眞經津鏡是あり然れハ御紀ハ御形の傳を漏されし
彼記ハハ稻穗を落されしかと雖も共ハ一事なるあ
りけり故此稻穗の事を中臣壽詞ハハ高天原ニ神留
坐須皇親神漏岐神漏美乃命遠持天云と皇孫尊波高
天原ニ事始天豐葦原乃瑞穗乃國遠安國止平ケ久所知
食天天津日嗣乃天都高御座ニ御坐天天都御膳遠長
御膳乃遠御膳止千秋乃五百秋ニ瑞穗遠平ケ久安ケ久由
庭ニ所知食止事依志奉と云と見へて此齋庭と云
るハ傳十九四十三丁五十二丁ハ注るが如く新嘗の齋場を云

て此御天降の元年ハ始て天上の稻穗をハ聞食と爲て
神籬を此土ハ建て天神地祇を祭祀せ御在ー坐け
るありけり大嘗祭詞ハ高天原ニ神留坐皇睦神漏伎
神漏弥命以天社国社登敷坐皆皇神等前ニ白久今年
十一月中卯日ニ天都御食乃長御食能遠御食登皇御
孫命乃大嘗聞食年為故ニ皇神等相宇豆乃比奉氐堅
磐ニ常磐ニ齋此奉利茂御世ニ幸門奉年止依志氐千秋五
百秋ニ平久安久聞食氐云と有る此御文を読味ハ
るハ右ハ引る祈年月次祭詞ハ神籬を建樹て齋奉れ
る趣あるを此ハ其神籬ハ祀ハれ給へる御上を申す

故ゆ天社国社登數坐留といふ事あり皇神等相宇豆乃
比奉氏云々茂御世尓幸閑奉止依志と有ハ此の稲穂
を事依し奉らせ給へる御事より係て當年の新穀の
成熟へる上を神ゆ申させ給へる者あり此を以て御
天降の即初国所知食し御在し坐ける大御政の始ゆ
先此斎庭之穂を當御すの御事をバ行ハせ給へる者と
こそハ所見ちゆけれ下八百九十一丁ゆ注せる高千穂峯の
地名を合せ考ふ可き者あり但右八百三十六丁ゆ注
し也先度ゆ虚天より引返して天上ゆ昇らせ御在し
坐しうゞも天大明命ハ其御時ゆ丹後国ゆ天降らせ
御在し坐けるあり其時の稲穂ハ丹後の御事之
ゆ就て丹後風土記ゆ往昔豊宇気大神天降干當国之

伊去奈子嶽坐之時天道日女命等請申大神五穀及衆
蚕等之種矣便於其嶽堀眞名井灌其水以定水田陸田
云々然後復大神者登高天原せと有を見るゆ初度ゆ
ハ其御霊実と稲穂とハ丹後国ゆ天降らせ給ひ稲穂
を遺して御霊実ハ天上ゆ昇らせ給ひ後度ゆハ高千
穂宮ゆ天降らせ給へる御事と思しきを人ハ如何見
らむ第六ゆハ先駈の神等の較略あり此第四一書
ゆ于時大伴連遠祖天忍日命帥来目部遠祖天穂津大
来目背負天磐靫臂著稜威高鞆手執天槍槍弓天羽と
矢及副持八目鳴鏑又帯頸槌劒而立天孫之前遊行降
来と有る此事古語拾遺も同文ゆて天穂津大来目の
下を帯仗前驅と四字ゆ切めたり右の趣ゆてハ天忍
日命ゆ天穂津大来目を帥て天降らせ給ふ由あるを

（下十二十七丁ゆ云る事共を見合す可し）

古事記ハ然〻ず故尓天忍日命天津久米命二人取賀
矢之石鏃取佩頸椎之大刀取持天之波士弓手挾天之
真鹿児矢立御前而仕奉故其天忍日命此者大伴連等之祖天津
久米命此者久米直等之祖也と所見たるが如く相中古の左右
近衛府の如く相並ひて前駆し仕奉られしなれば然れ
ども天忍日命ハ其上ハ立給へる故ハ自然ハ帥ゐる
状なりしかや記傳十五七十六十ハ久米直ハ白檮原御世
大久米命など迄ハ大伴〻相並ひたる氏なりしを其
子孫ハ至りてハ大伴氏のみ榮えたりし程ハ久米ハ
其下ハ属る者なりしを書紀ハ神代巻をも神武天皇

御巻をも後ハ其子孫の衰たる時の趣を以て記されし
たる者〻所見たり万葉十八二十一十ハ家持卿歌ハ大伴
能遠都神祖乃其名子婆大来目主登於比母知豆都加
倍之官〻詠れたるも大伴の祖神の大久米を帥主れ
る由ハて書紀の趣なり取要〻所見たる天大ハ此意味ハ
有べき事なり大伴〻云ハ万葉七巻四十ハ敦賀流伴
雄廣伎大伴尓云〻あり有て其部の大
ある由なり久米ハ国造本紀ハ久味〻有て後世ハ謂
ゆる組子の事なり姓氏録大伴宿祢の下ハも天押日
命大来目部立御前降于日向高千穂峯然後以大来目
部為天叛負部天叛負之号起於此也と云事見えたり
茅ヒハ猿田彦神の御迎ハ出させ御在し坐ける一
件なり此茅二ノ一書ハ已而且降之間先駆者還白有二

神居天八衢之衢其鼻長七咫背長七足餘當言七尋且口尻
明耀眼如八咫鏡而赤酸醬也即遣從神往問時
有八十萬神皆不得目勝相問故特勅天鈿女曰汝是目
勝於人者宜往問之天鈿女乃露其胸乳抑裳帶於臍
下而笑嘲向立是時衢神問曰天鈿女汝為之何故耶對
曰天照太神之子所幸道路有如此居之者誰也敢問之
衢神對曰聞天照太神之子今當降行故奉迎相待吾名
是猿田彦大神時天鈿女復問曰汝將先我行乎將抑我
先汝行乎對曰吾先啓行天鈿女復問曰汝何處到耶皇
孫何處到耶對曰天神之子則當到筑紫日向高千穂槵

觸之峯吾則當到伊勢之狹長田五十鈴川上因曰発顯
我者汝也故汝可以送我而致之矣天鈿女還詣狀報狀
ゝ所見如ゝ古事記ゝ尓日子番能迩ゝ藝命將天降
之時居天之八衢而上光高天原下光葦原中国之神於
是有故尓天照太御神高木神之命以詔天宇受賣神汝
者雖有女人共伊弉諾迎布神面勝神故專汝往將問
者吾御子為天降之道誰如此而居故問賜之時答白僕
者国神名猿田毘古神也所以出居者聞天神御子天降
坐故仕奉御前奉向之侍ゝ所見ゝる此猿田彦神ゝ聞
えさすらゝ傳三十 百十 丁ゝ注るゝ如く味耜高彦根

神を渡らせ給へるか天神御子を天八衢に待迎へ奉
らせ給へるハ古事記に謂ゆる亦僕子等百八十神者
即八重事代主神為神之御尾前而仕奉者是神者非也
と御父大神より奏し聞えさせ給へる御言の信此に
初て御在坐けるなり此意味なりハ上六百二十三丁
注の中(右)但(右)上ハ百二十六丁に注るが如く此段
一ノ一書に是時歸順之首渠者大物主神及事代
主神乃合八十万神於天高市以昇天陳其誠款之至
云と有る此時に其御事を申させ給ふ可き
然計り皇祖天神より問せ給ふ程に出立せ給へるハ
如何と思ふ人も有なめども其時ハ宣領八十万
神永為皇孫奉護乃使還降之と仰給へるハ二神に係
て詔給へるにてなり詔命なりけれハ此時
に奉迎らせ給ふ事なるを取立て奏させ給ふ可き
ざる事を曉る可し是なむ奇しく妙なる所なる

勞ハかハ日神と猿田彦神と御幽契の較略なり然る
ハ右の勞二ノ一書の趣を熟見るに此に猿田彦神ハ皇
御孫尊の御天降を啓行き申す為に出させ給へるなり
然るに其天鈿女命の問に汝何處到耶と
有る此に深き所以ハ有べからけるなり如何と云に其
啓行に出来れる神に對ハせるハ皇御孫尊の御行方
をこそ聞食る可きなりけれ然るを其神の落着く處を
聞せ給ふハ全く皇太神の御霊の鎮り御在坐む地
の事を其神の奏させ給へるに就て其御行方の事を先
問せ給へるなりけり此時の猿田彦神の御對に天

(傳世二一百十に至りて委しく明らむ可き事なるべし一通りこゝにてむ)

神之子則當到筑紫日向高千穂穂解之峯と申させ給
へるハ皇御孫尊を御在し坐しめ奉る地なれハ然も
有なむ―を次ハ吾則應到伊勢之狹長田五十鈴川上
と有て已命の御上を申さるゝ時ハ如何しき御事ハ
り然るを古語拾遺巻向玉城朝餌ハ令皇女倭姫命奉
斎天照太神仍隨神教立其祠於伊勢国五十鈴川上因
興斎宮令倭姫命居焉始在天上預結幽契衢神先降深
有以矣と所見たる此ハ幽契を云事決めて深き所以
有べ―其二十五年御紀皇太神の御鎮座の御事を書
されたる終ハ則天照太神始自天降之處也とも有り

此を以見るハ其始天鈿女命の問ハも皇御孫尊ハ何
處ハ御在し坐し皇大神ハ何處ハ御在し坐ぞと問聞
えさせ給へるなるが其ハ對へて猿田彦神の皇御孫
尊ハ筑紫日向の高千穂峯ハ天降ゝせ給ひ吾ハ皇太
神の大御供奉(仕)りて伊勢の狹長田五十鈴川上ハ到著
むとハ奏させ給へるハ天ハ衢より道を二ハ分け
其處ハハ降著せ御在し坐て然後ハ猿田彦神ハ其伊
勢国より高千穂宮ハ參趣き仕奉ゝせ給ひし者なり
けり記傳十五三十五丁ハ先初ハ猿田彦神の答ハ吾先啓
行云と天神之子則當到筑紫日向吾則應到伊勢と申

給へる抑皇御孫尊の日向国に降坐むに其啓行の神の伊勢に降給ふ事深き所以有り豊受宮儀式帳に天照坐皇太神始巻向玉城宮御世天皇御世国に處に大宮處求賜時度會乃宇治乃伊須乃河上に大宮供奉尓時大長谷天皇御夢に誨覺賜久吾高天原坐豆見志麻岐賜志處尓志都眞刺坐奴云こと有り斯れば此御霊鏡を後遂に此地に鎮坐しめむと太御神高御自天原に坐て豫てより所念し設たる事あり然れば猿田彦神の啓行あるべき此伊勢に到給ふも古語拾遺に始在天上結幽契衢神先降深有以矣と所見たる如く

本より此所以由縁有る故に此御霊鏡を終に鎮坐べき處へ先導送り奉らむ為なり故其御天降の時に皇御孫命に附副ひて此御鏡を戴奉れる御従神に彼啓行神の導の任に自然先此伊勢国に降著しなり始自天降るに此時の事なりけり若然らずば日向に降給ふ皇御孫命の啓行神の伊勢へ降給ふむ事何の由も無く徒なるべしや備右の如く此御鏡に先伊勢に降著給ひしを日向に著給へる皇御孫命の御許に送奉り置て猿田彦神に御賜を賜りて又伊勢に還給ひしなりと云れたるに実に見徹たりたる如き説なるむ

有ける但其御紀の文を良海本のみ則天照大神始自天降経二十余處今在此宮と有れども諸本の右の如く有み従ふ可あり諸本のみ御天降の御事を書して其二十余處を経て此の鎮坐す御事を略き良海本のみ御鎮坐の御事のことを書して御天降の始め御事を略ける者なり右の降と経との間の之處也の三字を脱せるのみて正〳〵ハ則天照大神始自天降之處也経二十余處今在此宮と有るべしうが調へる文なるべしと〇高皇産霊尊此正書の例のハ有れども実の

ハ天照大神高皇産霊尊神皇産霊尊三柱の太御神の御計ひの御在坐す御事上二十五丁の注に奉るが如し

〇真床追衾第四一書の以真床覆衾云と有り海宮遊行章第六一書彦火火出見尊の御在坐たる所の乃設三床諸入於是天孫於遠床則拭其両足於中床

（第六の一書の用真床覆衾）

則據其両手於内床則寛坐於真床覆衾之上と所見たり其両足を拭ハせ給ひ其両手を據させ給へるハ其遠床中床のも各真床覆衾の設有りけり斯れハ其御床の上の覆奉る御被のみて君上などの可畏き大御面を仇下の見えさせ給ふなどく裝束ひ奉る御物とハ所見たり口訣の真床追衾者御帳也追覆也と注し釈の私記問此衾之名其義如何答衾者卧床之時覆之物也真者褒美之辞也故謂真床追衾一書文追字作覆也訓讀相通之故並用今世太神宮以下諸社神体奉覆御衾是縁耳と所見たり此の就て思ふの真床ハ御

（又其豊玉姫命の産殿の所のも遂以真床覆衾及草葺其児置之波殿とも見え）

合わて天降高御座の載奉り眞床追衾を覆奉れるあゞ〳〵天降奉〳〵せ給へる儀式天皇即位儀の皇帝服冕服即高座云ゞ二人女孺執翳左右分奉翳御帳命婦二人褰御帳ゞ有る御帳即眞床追衾あり夫木廿一の高御座雲の御帳を褰ぐゞて昇る御階の詠も有るあと詠る是

床あり其御床を置くの御輿の御車の御舩の設御在し坐ずい亦得有べらざるあり万葉十九三十九丁の蜻島山跡国字天雲亦磐舩浮等母亦倍亦眞可伊繁貴伊許藝都追国肴之敷志氏安母里麻之掃平千代累弥嗣継亦所知来流天之日継等神奈我良我皇乃云〻と有ハ此時の御事を詠る者あり けれバ此を以て天磐舩ある事を著きを倭姫命世記皇太神の御遷行の所の美濃縣主角鏑作而進御舩二雙捧舩者天之曾已立抱舩者天之御都張止白而進支と有る此賀詞の捧げたる舩ハ天之底立と上天の極底の如く屋の覆ふを云

ひ抱きたる舩ハ天之御戸張と云ふ其舩の戴奉りて御戸張を垂たるを天象の羅列れるの見立たる者の事大ハ似著ハしき事なり古事記明宮段宇遲能和紀郎子の御事をバ亦其山之上張絶垣立帷幕詐以舍人為王露坐呉床百官恭敬往来之狀既如王子之坐所而と有が如く君の御座ふハ絶垣を張り帷幕を立る上せの習あり事ハて皇太神宮儀式帳新宮遷奉儀式行事ハ人垣立衣垣曳豆蓋刺羽等捧豆幸行と有ハ今絹垣の事ハて絶を長く引延て垣の如く立隔

つる事ゝして御舍の内ゝして八御帳を垂るゝゝ同し狀
ある者あり但眞床追衾ハ御床の上ゝ覆ふ物絹垣ハ
御車の外を圍める物御帳ハ御殿の内ゝ
隔を成す料の物ゝ也其物各一なるゝゝ非れども
口訣の注ゝ本著て其用ひさせ給ふ意味の類なる事
を此ゝ明す者あり然れば太神宮式造備雜物の條ゝ太神宮舩
代三具種代一具度會宮舩代四具種代一具と見えて
其より以前ゝ造舩代祭と云も有て正殿の心御柱と
共ゝ最重き物ゝ為なるゝ舩代ハ字の如くゝ舩の代
なる由ゝして皇太神の大御靈をも天磐舩ゝ載奉りし
古例を傳たり〻物と見ゝ其御裝束の中ゝ生溢絹被
二條長九尺廣四幅納綿四屯一條無綿小窠錦被一條著緋裏長九尺廣四幅納綿

廿屯小文紫被一條長五尺廣二幅納綿八屯小文緋被一條長廣如上屋形
錦被一條長廣如上小文緋絹一疋折累敷料帛被三條二條長一丈廣四幅
廣四幅納綿各二十屯一條長九尺廣四幅無綿五窠錦被一條長一丈廣五幅
著緋裏納綿二條上十屯と有ハ皆其御舩代を覆奉る料なり荒祭宮ゝ絹被
一條帛被一條各長七尺廣三幅納綿八屯と有て其余別宮の御裝
束なるも右ゝ同じく度會宮御裝束ゝ帛被一條長八尺四
幅刺車錦被二條長各八尺舩代内數小綾帛被二條各長
八尺二幅上覆帛被一條長八尺小綾紫被一條長八尺四幅と見
え相殿神三座裝束ゝも帛被三條絹被三條已上各長三尺五寸
廣二幅納綿五竹と有て多賀宮の御も右と一なり是即上代

に謂ゆる真床覆衾の遺制なるかて甚も可畏き御体を顕かみ為はべき御装束なめ所れば後世の俗意を以て見べうざるなり猶太神宮御装束に壁代絹帳三條一條長六丈廣六幅二條長九尺廣二幅天井覆絹帷一條長三丈六尺三寸廣九幅内敷屋絹帳二條高一丈三寸廣十二幅幌一條長七尺三寸廣四幅と有るべも皆其類なり大嘗祭式大嘗宮條に席上敷白端御帖一帖上施圾枕帖枕並掃部寮所設其製在彼寮式戸懸布幌内蔵寮と有て其御服に衾表三條敷衾表三條と見え建武年中行事神祇令食條に掃部頭参りて神座を敷くと云へ圾枕八重畳を下に敷く内侍参りて御衾を八重畳の上に奉

ると云へと有も右と同じく御設なり建暦御記に清涼殿御帳間の御事を四面有几帳帷夏生以胡粉畫葦雀一本鳥又一本宜雀冬朽木形畳三帖纁綱御座敷東上西柱角鏡二面東面濱床如恒と所見たるに謂ゆる御帳臺の御装束なるも取も直さず真床覆衾なる者なり其儀各別なれは非る者なり天書紀三に是後以天粁尊為中国主賜玄龍車追道真床之縁錦衾八尺流火鏡赤玉薙草劔と云事有て釈紀も引たれども思束無き事共なり其玄龍車は何と訓べきなれや駿河風土記に大己貴神の天降るに時に乗給へる天日鷲大羽鷲羽車と云物は見えたれども其と事違ひて甚く漢風なる名なり又縁錦衾と云るも神代の古の狀に非ず次なるに三種神宝の御事の異説なるかころ

良海本ハ覆於皇孫果彦火瓊々杵尊使降之と有て理甚能通ゆる故ハ其果字を補ひて覆於皇孫とを一句と為しつ偖皇孫と申奉るハ皇子皇孫なとの謂ハ非す皇御身と申奉る義ハて天下を統御し給ふ尊号ハ渡らせ給ひて天皇と申奉るも同ト意味なる由且此御天降の御時より始て天皇と聞え初ける所以共已ハ上ハ注し奉れるハ合せ読て明らめ奉る可し○覆ハ於保比麻都理氐と訓べし此巻四、一書第六一書等ハ此と同ト所ハ果字を用ひられて伎勢麻都理氐と訓るを私記ハ於保比天と訓る是なり

〈祝詞式ハ多く皇御孫之命ろ〻美頭ろ御舍仕奉氐天之御蔭日之御蔭止隱坐と有る隱坐ハ御殿の内ハ任せ給ふ御事を申奉るあれども其も顕ハ玉体を見えさせ御在し坐さる由なるハ等し〻此も眞床追衾を以て覆奉らせ給へるハ天書ハも以眞床錦衾覆之令華蓋天御蔭日御蔭秘藏之矣とも有て

り即眞床追衾の追字を他ハ覆字を作る共義ハて皇御孫尊の玉体を覆奉らせ給ひて仇賤を遠ざけさせ給ふ御結構なり〈彼天津高御座の御事と並びて皇位の重く辱く可畏く御在し坐す御事を示させ給へる旨ハなむ有ける偖於保布と於布と同義なる由ハ傳五ナ下注るハ如く神世七代章の大戸之道尊大戸之邊尊と申奉る戸之ハ殿なて大ハ共屋を覆ふ事を云て仇て大と云言ハ物の上より覆ふ義有ハ更ハて追字を於布と訓るも其追及と覆と意の同トけれハなり古事記朝倉段三重縁哥ハ毛ニ陀流都紀賀延

（祖皇御天神の深く遠く思慮らせ御在し坐て大ハ御心用ひ為させ給へるハ）

波本都延波阿米袁於幣理那加都延波阿豆麻袁於幣理志豆延波比那袁於幣理と有る於幣理を記傳四十二ノ十ノ於幣理ハ覆有なりと注されたるハ然る言めて於保比於保布と云べきを於比於布と云る即古言の例格なる者なり或説ハ皇御孫尊の御幼少食を以て果奉らせ給へる者の如く云るハ化ての事実ハ疎き説なれば取ハ足ず已ハも引る如く海宮遊行章第六ノ一書彦火と出見尊の玉座の御設ハ眞床覆衾の御事有て其ハ御床の御裝束なるを何とう見られけむ又通證ハ此胞衣之象也と云るおども推當の理屈と云者ハして何の據も無き事なり因云建磨御記ハ可遠ル賤事天子者殊可被止御身為是雖盡美端事也云と内と習礼等白地主上不為臣下云ハ無左右出藏外見方人事能く不可然云く但下方事返く可有用意無何畳御座乃不可然云く白地渡御座乗船大井

行幸用倚子云云有て船中の御座と虽も猶倚子を用給へり○果ハ都比尓と訓べし良海本ハ依て補へる事右ハ注るが如し○天津彦彦火瓊ニ杵尊良海本ハハ彦彦火を彦火てハ作れり其説上四十一丁ハ注り○使降之を阿麻久陀理麻佐志牟と訓来れり第一ノ一書ハ既而天照太神以思兼神妹萬幡豊秋津姫命配正哉吾勝ニ速日天忍穂耳尊為妃令降之於葦原中国第二ノ一書ハも則以高皇産霊尊之女子萬幡姫配天忍穂耳尊為妃降之と有と同例ハて此ハ大命合せて天降し給ふ皇祖天神の御方ハ係る所なるなり大後詞ハ国中尓荒振神等千尓波神問志問志賜

△同じ事なれど第六ノ一書ハ是時豊産霊尊乃用真床覆衾云云初掛授天八重雲以奉降と有て

神祐ハ掃賜ヒ志語問志磐根樹立草之垣葉乎毛語正氏天
之磐座放天之八重雲乎伊頭乃千別尓千別氏天降依
左志奉支と有ハ凡て(ずと)の御事を其天降遣ハさるゝ方
ハ係て申せるを此ハ使降之おでを天神ハ係て此(申せる)ハ
(おて自他の差有る事)
より以下ハ其天降り給ふ皇御孫尊の御事と為て記
(大命を奉て)
し分たせ給へり(金澤本ハ使降天之皇孫と有れど)
へ屬べきに非ず皇孫乃(も天字ハ決く衍)
云こも続く所あるあり(上皇孫ハ)
と作て下あるも然り御紀の御撰有し頃ハ実ハ然書
されけむと所思ゆるハ祝詞式おどハ皇御孫命又ハ
皇御孫之命おど御字を副て書れたりければ此天皇

御孫と作る事却りて古風ありつゝむを(後ハ)皇孫ハ二字
ハ切めゝれたる者ある可し上(三十九)ハ注せるが如く
孝德天皇大化二年御紀ハ自始治国皇祖之時と有ハ
此瓊こ杵尊を指奉ゝ世給へるおて続紀第一詔ハ高
天原尓事始而遠天皇御世こゝ第十四詔ハ高天原神
積坐云こ吾孫乃命乃將知食国天下止言依奉乃隨遠
皇祖御世始而第廿三詔ハ吾孫知食国天下止事依奉
乃任尓遠皇祖御世始豆と有る遠天皇是おり又其第
四詔ハ高天原與天降坐志天皇御世乎始而第六詔ハ
高天原由天降坐之天皇御世始而第十三詔ハ高天原

由天降坐之天皇御世字始天字と見え大倭本記ハ天皇之始天降來之時と有あるとも瓊〻杵尊を指て天皇と
ハ申奉らせ給へるなり又古事記大山津見神の御言ハ此今〻返石長比賣而獨留木
花之佐久夜毘賣故天神御子之御壽者木花之阿摩比
能微坐故是以至于今天皇等之御命不長也と有も瓊
〻杵尊を始て天皇等とハ申奉れるなり○天磐座此云阿麻能以
數矩羅常一ノ一書ハも見四神武天皇甲寅年御紀ハ於
是火瓊〻杵尊開天開披雲路と有を良海本ハ開天
闕と作り古事記ハ天之石位大祝詞辺ハ知崇神詞ハ
ハ天之磐座と作れたり（天書ハ離高御倉と見え）偖此磐を古より堅固き由の
称言あるハ狀ハ諸家説を成せり此ハ差別有べし彼

石窟天磐船天磐靫天磐盾等の磐石字ハ実字ハして
其磐石を以て製れる物を云なり又此の天磐座の如
きハ大三輪神三社鎮座次第ハ當社古来無宝倉唯有
三箇島居而已奥津磐座大物主命中津磐座大巳貴命
邊津磐座火雷名命など有る磐座ハ即是も實の磐石
を居て神の御座とハ爲る由なり釈ハ先師申云天者
天上之儀磐座者寄祝言者也と有る説大ハ近くして
磐ハ借字ハして齋座の義なり齋殿（イハヒドノ）齋戸（イハヒド）齋杵（イハヒヅキ）などハ
忌清なりたる由なるハ思合す可し大殿祭詞ハ皇親
神魯企神魯美之命以仕皇御孫之命字天津高御座ハ

坐氏天津璽乃鏡劔乎捧持賜天言壽宣志久皇我宇都御
子皇御孫之命此乃天津高御座尓坐氏天津日嗣乎万
千秋乃長秋尓大八洲書葦原瑞穗之国乎安国止平久
所知食止言寄奉賜此氏と有る上ある天津高御座の坐
氏と有ハ今坐氏ハ天神の皇御孫尊を此御座の合
坐奉給ふ由あるあり次ある坐氏と訓るハ鈴屋翁
の後釈ハ此乃とハ即上の天津高御座尓坐氏と有る
御座を指て詔ふあり其ハ上文を味ハふハ其高御座
を高天原より降して此御國ハても即其ハ天より持降
れる高御座を用ひ給ふ由あり彼天磐座を離れと有

とハ事の趣異ふして此ハ持て降給ふ可き御料ハ設
られたる御座と聞えたり故此乃天津高御座尓坐氏
とハ詔給へるあり」と注されき其下文ハ高御座の御
事を御床と有ハ就て思ふハ以眞床追衾覆於皇孫と
有ハ其持降らせ給ふ天津高御座の載奉らせ給ひ其
天津高御座あがらし天降し奉らせ給ふ謂ある事右八百
五十六丁ハ注し奉るが如し偖此の天磐座も本より高御
座の御事あるが此ハ皇祖天神の御座を離れさせ給
ふ由あり歴朝詔詞解一十四ハ高御座ハ天御座と云
むが如し高とハ天を云ふ唯高き由ハ非ず天皇の

御座ハ即高御座天原ハして天照太御神の坐ます御座
を受傳へ坐す由を以て高御座とハ申すなりと云れ
たり（猶下ケケハ高御座の御事ハ就て注し奉てる）事共をも合せ味ふ可き者なり（但此ハ皇
高御座を離れさせ御在し坐て其皇祖天神より授奉
うせ給ひける高御座ハ即せ御在し坐けるを又皇祖
天神の御手以て眞床追衾を覆ハせ給ひて天皇の威
儀を悉くハ備させ御在し坐る任ハ天降らせ給へる
御事と見奉り知べき者なり○離ハ波那礼と訓べし畧一ノ一書ハ
於是脱離天磐座古事記ハも離天之石位と有を記傳
十五六十七丁ハ離ハ波那礼と訓べし波那礼ハ自離るを
を云言なり波那知と訓む時ハ太御神の詔命を以て
令離を書紀第六ノ一書ハ是時高皇産霊尊乃用眞床覆

衾裏皇孫天津彦根火瓊瓊杵根尊而排披天八重雲以
奉降又大祓詞迂却崇神詞ハ天之磐座放ち（支）ち有も然
なり然れども此等ハ下ハ奉降或ハ天降依（左志）奉（支）ち
ど有る故ハ其趣ハ訓て宜しきを此ハ下ハ然る言ハ
無して天降坐と有れば其まで皆皇御孫命の御自ハ
御上より云る語ハて太御神の詔命を以て令為を云
ふ語ハ非るが故ハ波那礼と訓つ（取要神意）と云れたる
が如く此も右ハ使降之と云までハ其天降し給ふ皇
祖天神ハ係れる所ハて皇孫乃云ふなりハ其天降ら
せ給ふ皇御孫尊の大御自（自）の御上より云所なりけれ

八波那礼と訓すしてハ語脉通ずる所ある者あり
然るを今有る諸本の訓共ハ於志波那知氏と訓るハ
大ハ自他の差別を過てる者と云べし竹(物)取物語ハ
我国の内を離れて罷歩きしハ拾遺雑秋ハ物如こし
ける男離れ侍りて後云とあど自離るゝ方ありける
あり又玉の離天盤座と云ハ似著しきハ伊勢物語十
六段ハ年頃逢馴たる女漸く床離れて云て頼政集ハ
相語ひ侍りし女の漸く床離るゝ契と成て本住侍
りける山里へ送遣ハすとて」あど有も自離るゝを云
きめり○天八重雲第一書第四書第六書等ハ有
を其ハ常の如く夜幣具毛と訓るを此ハ如何して
古事記ハ天之八重多那雲と有と等しく訓来れるハ
甚ハ愛たき事なり八重ハ釋ハ数重之雲路と有り如
万葉二三十七丁ハ天雲之五百重之下ハ五二十ハ志良

久毛能智弖伊遥多天留十二十七丁ハ白雲五百遍隠十一
八十ハ天雲之八重雲隠あど有て八重五百重千重ハ
どゝふ皆同じ意なり多那雲ハ記傳十四六十七丁ハ多那
ハ棚引ハて虚空ハ西復ひ亘るを云ふ万葉四五十九丁ハ春
霞輕引時二六三十二丁ハ山高雲曽輕引七十六丁ハ朝霞不
止輕引八二十二丁ハ春霞輕引山乃十八丁ハ滓鹿能山ハ霞
輕引あど有る輕字ハ虚空ハ浮べる意以て書るなり
薄き意ハ非ず二二十五丁ハ向南山陣雲之七二十丁ハ大
葉山霞蒙九十二ハ高屋於霏霞麻天ハ十一七丁ハ遠山
霞被十二三十八丁ハ朝霞蒙山字あど作る何れも虚空ハ

廣ハ覆ひ亘る意あり又其七五十五丁の棚霧合雪毛零奴
可八十三二十四丁の棚雲刹雪者雪耒奴あど有る此等を
三三十九丁の雨不零殿雲流夜之十二十九の登能雲入雨
零河之十三十三の登能陰雨者落耒奴十七五十四丁の等
乃具毛利安米能布流日辛十八三十三丁の許能美由流久
毛保妣許里豆等能具毛理安米毛布良奴可あど詠て
多那と登能と通ふ音ゆて同じ右等の棚と多那と一
あり棚と書るゆ本より借字あり此棚と云物も雲
霧の空ゆ覆へると同じ狀ゆて空ゆ構ふる故ゆ号け
たるあれば本ハ同意あり神意と云れたるゆて甚能通

えたり但右ゆ云ふ棚ゆ僅ゆ風雲の往来ゆ冷際と云
過ぎぬべの事ありければ此ゆ榊分させ御在し坐ける
天八重雲ハ高天原より此顯国ゆ到らせ給ふ間の凡
てゆ亘る御事あるゆ就て思ふゆ祈年月次祭大神宮
詞ゆ天能壁立極国能退立限青雲能霜極白雲能隆坐
向伏限と有る是ゆて天能壁立極と云ハ上天の極際
と云ひ青雲能霜極と云ハ真天中ゆ積氣の充塞る限を云る事ゆし
有ければ其青雲の中ゆ幾層ゆも界を成して五百重
ゆも千重ゆも成れる事ハ天八衢あど云称の有ゆ
ても知られたり然れば此多那雲ハ揔天ゆ亘れる事

と知べきあり右の詞ハ白雲能隆坐向伏限と云を国
云ざるハ白雲の棚曳く空ハ其冷降より内の事ハ
有けれバ此を国土の事と為させたる上古の文法ハ
如處有る事を○排分ハ第二第四二書ハ如此きを唯
等閑〳〵む可し
第六ノ書ハ排披と作れたり神武天皇甲寅年御紀
ハ披雲路と披の一字をも訓と古事記ハハ押分と
有り記出雲神賀詞ハ天穂比命ヲ国體見ハ遣時ハ天
能八重雲ヲ押別代天翔国翔氏天下ヲ見廻氏万葉二
十七丁ハ天雲之八重掻別而一云天雲之なと所見たり
十七丁四十ハ之良久毋能知邊ヲ於之和氣安麻曽ニ理
多可吉多知夜麻など見えたり偖此言ハ神武天皇戊

八戸などを押開〳〵云

午年御紀ハ亦有尾而披磐石而出者天皇問之曰汝何
人對曰臣是磐排別之子（排別此云ヶ時和句）と有る排別ハ等し
くして甚く力を入て押分ル由ありけるハ右ハ謂内
る天八重雲の薫満たる大虚の大氣ハ一も甚と健剛
き者あるり故ハ人ハ水底ハ潜入ル如く為て天降〳〵
せ給へるありけり稜威之道別と而と有を以ても
其容易〳〵ざりけむ御狀を想像ハ奉る可く なむ有
ける其八天雲之八重掻別而と有も万葉十四十九丁ハ戀作
裳稲葉掻別家居者日本紀竟宴歌ハ佛す〳〵朝廷可畏
き荒磯海の浪掻別て住せる者を後撰戀五ハ伊勢海

ハ遊ぶ海士とも成ハしゝ浪搖別て海松藻潜らむ千
載春上ハ義やまし雪の下草搖別て誰を飛火の若菜
ゆゝむ右京大夫集ハ若き人々臺盤所ハ在し中を
搖別て後方ハ寄て有て搖の言大ハ重くして
排と云ハ異ゆゝめ狀ゆゝ又日本紀竟宴得猿田彦神紀朝臣淑望久方の天ハ重
雲振分て降ゆゝ君を我を迎へしと有るハ此ハ右の
排分又搖別と云ハ何れハ振別と云ハ其も擇別と云事ハ
て何れハ其分させ給ハ
狀の甚トゝハ同じ
○稜威之道別道別常
一ノ一書ハ出たるハ之字無し古事記ハハ伊都能知和
岐知和岐氐と書り大祓詞ハ天之八重雲乎伊頭乃千
別ハ千別ハ天降依左奉支云て天津神波天磐門乎押
披て天之八重雲乎伊頭乃千別ハ千別て所聞食武迂
御祖宗神詞ハ天之八重雲乎伊頭之千別支千別氐と有
ハ其稜威ハ釈ハ可畏之義と注せる然る言ハて即傳
十五百三十ハ注るが如し道別ハ字の如くハて神武
十五五十
天皇甲寅年御紀ハ謂ゆる披雲路駈山躍と云ふ是ゆゝ記傳
十五六十八十ハ知和岐ハ書紀ハ道別と書れたるが如く
道を排行ゆゝ上ゆゝハ体言下ゆゝハ用言ゆゝ
れしハ然る言ゆゝ備口訣ハ稜威道別と云者警蹕拂
御前謂也と注され纂疏ハ稜威可畏之意天孫行幸警
蹕前導行叱旦呵故曰道別と云と注させ給へる共ハ

甚奇〻十き説あるを就て思ふに大ふ其謂有り此常
四ノ一書ハ則引開天磐戸排分天八重雲以奉降于時大
伴連遠祖天忍日命帥来目部遠祖天槌津大来目背負
天磐靫帯稜威高鞆手捉天梔弓天羽〻矢及副持八
目鳴鏑又帯頭槌劔而立天孫之前遊行降来と有る此
事古事記ハも載たるが此ハ謂ゆる稜威之道別〻
而と云ふ是あり唯ハ雲路を排分させ給ふのみあり
むハい稜威云ことハ云べうもなるを此ハ警蹕の所
あるが故ハ要ハ其語ハ有るわけり万葉二十五十ハ
比左加多能安麻能乃比良伎多可知保乃多氐乃阿毛

理之須賣呂伎能可未能御代欲利波自由美字多尓藝
利母多之麻可胡也字多波左美蕪倍豆於保久米能麻
須良多祁字ニ佐吉尓多豆由伎登利於保世山河字伊
波祢左久美豆布美等保利久尓麻藝之都ニ知波夜夫
流神字許等年氐麻都呂倍奴比等字母夜波之波吉伎
欲米都可倍麻都里豆と是即稜威之道別〻にして子
狀ある者あり又記傳ハ云く大祓詞ハ天之八重
雲字と有ハ依くバ即雲を分るなれど
し此ハ雲字の下ハ而字も有れバ雲を分るを云ハい
非ず雲うこ〻ず何物ハ在れて分通るを云ハ
と有ハ然る言あるが警蹕の義を思漏されたり繹ハ
ハ八重雲路可畏之道此別降之心せと云るハ甚
き説ある ○日向襲之高千穂峯ハ日向国諸縣郡と大
者なり

隅国嚼於郡とゐ相跨れる霧島山是あり然るゐ日向
風土記ゐ臼杵郡知鋪郷ゐも高千穂二上峯と云名所
見たれども其ハ次ゐ百八十一ゐ離るゐ如く後人の所為
ゐて譌る由ハ第一ノ一書ゐ猿田彦神の天神之子則
當到筑紫日向高千穂穂觸之峯と申給ひて（正しく其地を指て）路行き奉
く世給へるゐ非ぬ所ゐ天降り御在し坐し著て其よ
り後ゐ其志し給ふ眞の高千穂峯ゐ到り御在し坐む
事ハ有まじき御事ゐあむ壓（イテ）て其霧島山ある證を云
むゐ此ゐ日向襲之高千穂峯と有て次ゐ自穂日二
上天浮橋ゐと書され第一ノ一書ゐい筑紫日向高千

穂穂觸之峯と有し此ゐハ襲の言を略られたれども
右ゐ穂日を穂觸と活うせたるゐて其一ある事灼然
く第二ノ一書ゐ日向穂日高千穂之峯と有ハ右の穂觸
と穂日ゐ云換たるのと第四ノ一書ゐハ日向襲之高千
穂穂日二上峯天浮橋と見え第六ノ一書ゐい日向襲之
高千穂添山峯と有て下ゐ添山此云曾麌里能耶麻と
有て何れも臼杵郡ゐハ更ゐ由無し古事記ゐハ竺紫
日向之高千穂之久士布流多氐ノ古語拾遺ゐ筑紫日向
高千穂穂觸之峯と有も共ゐ右の第一ノ一書の格なり
塵添埃嚢抄二六十六條ゐ引る風土記ゐ皇祖襃能勢心耆命

日向国贈於郡高茅穂穂生峯仁天降坐天逹供刹薩摩国閼駝郡竹屋村仁移給夫云て有る此ハ正しく郡名を云る事愈以て紀朞序ハ天孫降襲西化之時神武臨要東征之年と見え懐風藻序ハ襲山降躍之世橿原建邦之時と有も同意の文にて共ハ天神御子の天降り給へる地を以て襲国と云ふ古説あり然れば姓氏録大伴宿禰條ハ初天孫日向高千穂峯と見え万葉廿巻五十丁ハ比左加多能安麻能乃比良伎多可知保乃多気と阿毛理之と云て又常陸風土記ハ珠賣美万命自天降時云て綺日女命本自筑紫国日向二神之峰至三野国引津根之丘云て有ると何れも更ハ論つゝふ所ハ及ハず右ハ云所ハ同しく薩摩人八田知紀が書る

（吉事記序ハ番仁岐命初降于高千嶺神倭天皇経歴于秋津島と云事を）

（此二上の事ハ下九百五十ハ奉りて云べきなり）

襲峯一覧と云を見るハ白尾国柱の説を載て云く高千穂峯此地今日向大隅両国之界在山半東属日向諸縣郡西属大隅国贈於郡云こ二上者此山二峯突峭東号矛峰属諸縣郡絶頂建矛西号火氣布峯属贈於郡即二上之一峯也火常炎後世終陷凹今俗呼其大坑称御鉢其状空豁窅深目下数百丈人従其上邉如馬背行足甚危慄既又歴数険則矛峯と有て又此西峯と東峯との間を瀬田尾と云ふ昔時ハ霧島神社茲ハ在しかども度と炎上して峯崩れ岡陥りたれば神社をば今の地ハ迂坐成し奉りしと云ふ偖瀬田尾ハ瀬戸丘と書たれば

迫門丘の意あるヿ可し凡霧島西峯炎上の事續紀に桓武
天皇延暦七年七月己酉大宰府言去三月四日戌時當
大隅国贈於郡曽乃峯上火炎大熾響如雷動及亥時火
光稍止唯見黒烟然後雨沙峯下五六里沙石委積可二
尺其色黒焉と有る是始あり其社傳に記す所に六條
天皇仁安二年より起れり其後四條天皇文暦元甲午
年十二月廿八日の炎より大なるに無し此時祠宇悉
皆燒盡すと見えたり此後久しく熄て又後奈良天皇
天文廿三甲寅年より翌弘治元乙卯年まで炎ゆ此年
加賀国白山又炎たり其より正親町天皇永禄九丙子
年九月九日炎え人多く焚死す此年天下大に乱る同
天皇天正四丙子年より同六戊寅年まで又炎ゆ此年
鎮西大乱あり又後陽成天皇慶長三戊戌年より五年
庚子まで炎ゆ其三年に豊臣公薨せられ五年に關ヶ原
の乱有り後水尾天皇慶長十八年辛丑より翌年まで
又炎ゆ此年諸国大地震あり同天皇元和三年丁巳よ
り翌年まで炎ゆ明正天皇寛永十四年丁丑より翌年
に至りて炎たるに此年島原の兵乱有り後西天皇萬
治二年己亥正月より寛文元年に至りて炎ゆ此辛丑
歳皇宮炎上す同二年壬寅より四年三月に至るまで

炎内和漢合運云寛文二年十月大隅國大地震海成陸
止之々有り中御門天皇享保元年丙申九月廿六日炎
此時東霧島社狭野社瀬戸尾社神德院及高原高崎小
林郷等民屋山林皆焚たり同二年丁酉正月三日炎俗
ハ新燃と云ふ此時錫杖院及管下民居凡諸縣郡諸邑
田園前後被災者十三万六千三百區云々後櫻町天皇
明和八年辛卯七月より翌年壬辰ハ至りて炎ゆ又享保
元年より此年ハ至り大ハ火を發して連日止熄ず岩
石化して焰々成り虛空より隕ち沙石浮を簸るが如
く灰燼雨を降すが似たり又晝ハして夜の如く行客

△其瀬田尾ハ在り霧島神社と云るハ謂ゆる西霧島宮ゾ奉ハ一と下ハ位九ハ注一奉此大隅国贈於郡式高千穂神社是あり

路を失ひ人と相比ひて筵席を戴きて其壓傷を遮防
げり數里の間田疇を埋没し草木焦枯る皆今人の親
しく視る所あり其往昔の火勢推て察ス可し取要云
り知紀云く霧島炎上ハ右の如く數十度ハ及べるハ
うむを其度ごとをバ凡て彼火氣布峯ありと思取れ
しハ誤あり然るハ山中炎址多在る中ハ火氣布峯ハ
予ガ文政五年ハ登り一時ハ猶火の名残有けれ
バ上古ハ燃しハ此峯ハ非る可し其ハ山中ハ在る
池共ハ皆炎址と見ゆるを今ハ海原如して潮湖水と
成たれバ此等の炎しハ何れの代ありけむも知べう

うず」と云るハ然も有ぬ可き理ハあむ又云く右ハ此
の間を瀬田尾と云り云て有る此ハ即矛峯と御鉾西峯と東峯と
との中間を云るあるを今俗瀬田尾越と云て西霧島より
高原郷へ越る所ハ矛峯と此韓国嶽との中間ハ
新燃嶽と云ふ低き峯有る其新燃嶽と矛峯との間を
云なり土人の言ハ山の撓て低き所を多袁と云と云るい然る言
思ふハ背多袁理の義なるべし云と云るい然る言
ハて古事記王垣宮段ハ山之多和と有る其ハて万葉
ハ謂ハる多袁理是なり今も中洲の方言ハ山の多和
なる所を某多袁と云る類是なり同書ハ伊知地李安と云人の襲山考
を抄録せるハ此霧島山の事を贈於郡有郷名志摩国用
島見和名鈔蓋国人常呼霧島多略霧字単以島呼猶諸
島人今呼其郷只曰島例遂為地名可亦観也但和名鈔
志摩郷及続紀曾乃峯皆載贈於郡則在西霧島隣亦可

可知矣而曾乃字則本龍也続紀令諸国定郡郷名各為
二字時添之韻書曰贈㕓猶紀伊例而今曾於郡也至今
方俗虽書曾於呼曰曾乃尚不異於延暦時自神古時大
隅隼人世領其地因以曾乃君為其姓則続紀天平十
三年閏三月乙卯授外従五位下曾乃君多理志佐外従五位
下云又十五年七月賜饗於隼人等授外従五位下曾乃君
多利志佐外正五位上云又天平勝宝元年八月壬午大隅薩
摩両国隼人等貢御調并奏土風哥舞奚末詔授外正五位
上曾乃君多利志佐従五位下云而天平宝字三年十月辛丑
天下諸姓著君字者換以公字云由是多利志佐等改書

書曾公則神護景雲三年十一月庚寅天皇臨軒大隅薩摩隼人奏俗伎授曾公足麻呂外従五位下云此類也而今曾於郡曾於郡郷尚有杜名隼人塚在郷之上神社西數百歩而祀其先神火闌降命於同社庭曰大隅神社又其隣郷国分亦有隼人城遺墟在於要嶮所蓋火闌降命以来神胤隼人所世居也今云大隅隼人世領其地因以曾乃君為其姓号ハ国造本紀ハ大隅國造纒向日代朝御世治平隼人同祖神小仁徳帝代者伏布為日佐賜ゆる止上国造と有る是右の曾乃君の姓祖ある可し又其謂ゆる止上神社ハ本書ハ止上六所大撞現在贈於郡郷重久村志宜理の杜と云ふ奉祀彦火火出見尊豊玉姫命左瓊と符尊木花開耶姫命右菩不合尊玉依姫命社傳云景行天皇熊襲を討給ひし時神の稜威を願給ひし故ハ御勅詔ありて往古ハ當社より東の尾群峯の頂ハ在しを数百歳の昔今の處ハ近宮すと云ふ社

公此大隅隼人の事下九百八十六丁ハ注す可し

の西方数百歩ハ眞魚板と云ふ田中ハ小き叢林有り俗ハ隼人塚と云ふ未社ハ大隅神社三ツの社とも云ふ本社鳥居の脇ハ在り奉祀火闌降命土人大隅国の地主神と称す云と云り其止上も處神ハて其地主神の謂ふべ正長二年十月二日伊勢季者記上小河里山野境云西境隼人城乾隅境弟子尤名之類皆足以証其當時爲上小河里舊名曾小川而所謂梟帥居其川上故曰川上梟帥云其云曾小則曾於訛後分上下今為村名隷国分郷弟子尤亦為村名隷清水郷詳見下文而隼人城後大永五年九月二日清水城主本田親安称三河守攻而取之事見樺山玄佐日記迨以清水尚為居城以隼人城新為産城遂名新城一説慶長十年賈明公徒都於此名新城云恐誤城有巖記曰長

狩懐此隼人所栖云因祀隼人為天文五年事今尚存為又曽乃字則天福二年三月十六日重校證書題曽乃郡司殿曳文或作曽野文治三年四月十一日檜前篤平曰先邑萩原在曽野自天福下皆清水鄉薑明寺文書下沽券亦同之或建久九年三月注進大隅国圖田帳亦書曽野郡司篤平或作僧乃見貞應二年二月十日僧圓慶之沽券字畫或異皆典統紀合而神代所謂襲之典我曽乃郡無毫可疑如上所証而今嶽之西南有地名胸副吸左曽於郡春山野進陟其阪四野高敞而聳東北剗天者為高千穂嶽又秀西南吐者青者為笠狭嶽今野間嶽実足以証不見国行之神蹤為但高千穂中古土人其呼之亦常

曰智尾遂為地名亦在曽於郡觀康暦三年五月廿日齡岳公本藩六世賜第子九若德書曰曽於郡智尾名事者可以証也若德姓建部氏世領第子九因以為氏建久八年圖田帳載第子九五町田所建部宗房所知者蓋若德之先也第子九既見上文而第子九村今有乳母神社第子九氏世主祭之無他名智尾地則知康暦後寖失其名為於是乎古之為風土記者亦載是事曰皇祖裒能忍耆命天降於日向国贈於郡高茅穂穂生峯云実可謂與世所撰史無乖戾矣而其風土記天文以前尚傳于世文安三年五月観勝寺僧行誉者著埃嚢抄九五百三十六條共為七卷後又次

門天文元年二月継補遺漏増為二十卷（九七百三十七條）更曰塵
添埃囊抄其第二卷六十六條引此古語以説竹刀事據
是観之風土記原本則言高茅穂峯在贈於郡亦足以証
焉今云右の西境隼人城乾隅境弟子丸名と云るハ名
ハ何(ハ)名某名と云て田の字を云なり其智尾名と
云も右の同じ此地を當昔智尾と云けむハ如何ぞも
千穂を訛れる者なる何し其乳母神社も本より千穂
神社なる時ハ續後紀の嘉和十年九月丙戌朔甲辰日
向国無位高智保皇神奉授従五(下)位下三代実録の天
安二年十月廿二日己酉授日向国従五位上高智保神
従四位下と有ハ是ハて其山の皇神を此の祀れるが
千穂の名を亡ひてより其社も漸衰へさせ給へるが
や其胸副改ハ第二ノ一書の薨(完)実胸副自頸上貫国行
云云と有る是なり其至狭嶽
云云と云ハ薩摩国河邊郡の在り
然迫其後覚文中通村知
卿兼台命纂寫斯書塵添所載風土記之語無見其本必

卿等未曾知別有天文前良本矣惜乎當時只得弘治中所
殘欽本寫以呈上而今其本專行于世則載臼杵郡知鋪
鄉之所以号知鋪等是然至如贈於郡高千穂之事皆缺
而已矣是故本居氏之博識亦尚至不免無惑於間然於
歴史既書天降於日向襲之高千穂峯矣或書日向襲之
高千穂添山峯観其峯字下両置矣字亦撰者意則知其
所決定者明驗莫善焉故提其要則只書襲山峯墓或書
天孫降襲或書襲山降躍自有書後至弘仁中既有明文
以傳于世故続紀則載曾乃峯於贈於郡風土記（天文前古本）
載之贈於郡大八洲記以襲国為大隅国贈於郡平家物

語日本最初峯霧島嶽云歴に著明無間然烏則曷更可
妄求諸贈於郡之外而得焉乎哉但延暦時省高千穂字
只書曾乃峯書紀載高千穂添山峯至是則省上中尓而後更名霧島説見上
文自時而於日向群峯寖至乎如無別日高千穂者且古
之所謂襲之高千穂亦至康暦中略智尾而僅存其名於
曾於郡之地則於日杵方蓋好事者頼其地固祀高智保
皇神而書紀等記其天降多重日日向高千穂峯所謂二
上為屋屢発火所顕峯客而名亦隨易如無可當於日向
者後人妄揆天孫降襲之古説以名其郷謂之知鉾又為
是名一岡山曰高千穂山而所連山各命之名曰穂觸峯

曰速日峯皆在郡之三田井村中略或曰智尾名存曾於郡
見康暦書亦尾與穂不合則恐非高千穂之遺名也李安
對曰穂與尾之訛亦久矣建久八年日向国圖田帳於日
杵郡書高智尾社八町且文保元年十二月廿一日幕府政所以
我道義公藩侯四世為諸所地頭下文亦書日向國高知尾莊
彼此既訛以行千世如是也矣可不証乎問者乃服今云旧杵高
郡高千穂の説ハ本居翁より已ゐ先ゐ在り口訣ゐ高千穂峯日杵郡知鉾郷也と注して日向風土記を引た
る此を始として欽紀又同説ゐて其記を引て証せる
のこゐて襲国の事を云ず通証も記傳ゐ同じきハ古
くより右の風土記の文ゐ依て惑たる者多ゐ殊ゐ平
田史ゐハ其ハゐ依て尓天津彦火瓊々杵命於高千穂二
上峯天降云て既而移華襲之高千穂穂日二上峯矣と
書るハ余ある扛撰と云べし八田知紀説ゐ右の風土

記ハ即我霧島ハ就ての古事ありけむを旧杵郡の方ハ誤傳へし ある可し 右の文ハ後人改号智鍾と有ハ如何ある上ハ彼天暗冥晝夜不別と有ハ霧島ハ霧深きハ因有て聞え又稲穂の縁も正しく此峯ハ在り云々と云るハ然る言あり猶右の風土記の文ハ次ハ百八十二丁ハ注す可し其平家物語の文ハ長門本四巻丹波少将成経主の薩摩国の沖小島ハ流されける時霧島山ハ詣るれし詞書ハ云く夫より室町舩引大山と て明影日影も涌るぬ深山の嶽くたる石巖を凌ぎて越杲日向国西方島津荘ハ着給ふ彼荘の内ハ朝鞍野と云所ハ一の峯立聳えて煙絶せぬ所有り日本最初の神の峯霧島嶽と号す金峯山欽四嶽冨士高嶺よりも最初の峯と云ふ六所摧現の霊地ありと云て有り其六所摧現と申すハ神名式ハ謂ゆる日向国諸縣郡霧島神社今東霧島宮と云ハ高城郷東霧島村ハ在り西霧島宮と云ハ大隅国贈於郷田口村ハ在りと云ふ是ある可し 又我霧島山南麓有地名官ヒ都島等處迫天授元年島津資忠城于都島改曰城其為地也平野沃壤方餘十里四繞峯巒恰如舊都而有地名都島宮ヒ高城高原都街道奥宮亦古事記所謂高千穂宮之遺址云是以我藩自古相傳以霧島嶽為高千穂峯而莫獨貽疑者可謂有世所兼矣迄至木居氏古事記傳盛行于世読者往々疑贈於郡霧島嶽與臼杵郡高千穂山有両説多惑眞贋故我藩史白尾国柱探勝旧杵観而覚非有所著書今也李安編伴氏譜田猟史傳以輯天忍日命為前駆瓊杵尊天降於襲之高千穂峯之事粗有所考故贅于此以俟来哲耳天保元年庚寅月日と云るハ古書ハ徴を取り地理ハ驗ヒて論へる説ハ〜て実ハ憶ある定め

わしに有けれバ此高千穂峯の古傳ハ盡く此に過たるハ有べうゝず思ゆる任に今此峯に係れる全文を此に引出たるあり予此傳を著ハすに就てハ右に謂ゆる旧(ヨ)杵郡あるとの贈於郡あるとの直贈を正し見まゝ欲く思ひて薩摩国に物為たりつるに八田知紀ぬし此考を見せたるに地理の如きハ他国より行見たりとて容易く知うゝ者に非りけれバ此考を読見て大に其説の間然(ナシ)する所無きに従ひて其山に登る事をも止て帰れるあり然して右に本居翁一人を罰する事あれども已に口訣釋紀より以来何れも其奥地を知ずして唯高千穂の名のみ徴して書れたり者あれバ此諸家の誤れるを以て何ぞ翁の咎とハ云べりうむ凡古書に依て地理を説くに親しく行見ずして云説ハ何れの解も同じ一国の事と云へバ漫に引付る事多く又其国人を以て地理を探しむるハ大に宜しと雖も其自国に堂しして他国の故事にでをも取入て我有と為る者少うざれバ其撰ハ傍より公正なる定めを為る人にハ如ずあるを有ける殊に神世三御代の御事跡ハ右の外にも日向全国に亘りて有べき事あり然るに二百年以来日向国の半ハ諸家此を領せざる此を開外と云ふ其半ハ薩摩家より領せざる此を開内と云ふ此に依て開内と開外とハ同じ一国の内ありと雖

も互ひに相往来ふ事無りければ他国よりも疎しき故を以て多くハ開内ハ引付又ハ開外の有と為る類ひうるざれば他ゆりハ其用心有べき事本よりあり但右の伊知地知季安の説ハ然る私有ハ非るが故ハ悉く此を諾ふ者あり○日向風土記の辨を立べし旧杵郡内知鋪郷天津彦火瓊々杵尊天降於日向之高千穂二上峯時天暗晝夜不別人物失道物色難別於茲有土蜘蛛名曰大鉗小鉗二人奏言皇孫尊以御手挿稲千穂為籾投散四方必得開晴于時如大鉗等所奏搓千穂稲為籾投散即天開晴日月照光因曰高千穂二上峯後人改号知鋪と見えたるハ和名抄ハ旧杵郡智保郷と云有る其ハ就ての古説あり然るハ古風土記ハ何れも命字を書るハ右の瓊々杵尊皇孫尊等ハ御紀の体なり已ハ襲之高千穂二上峯の傳有る上ハ此(知保郷)を高千穂二上峯と云ハ非ず其襲之高千穂ハ在り事を此ハ語る文ある事著明し天降時と云ハ其猿田彦神の啓行して襲之高千穂を指て天降り御在し坐ける御時の事ハりけり天暗冥晝夜不別人物失道物色難別と云ハ天上より天降り御在し坐て今其高千穂峯ハ御在し坐し著せ給ふハむと為させ給ふハ當りて此土の近く成ハ隨ひて雲霧の深く立重なるを云て右の事共ハ其天路ハての事なれば此ハ就ての考ハ其土人の説と

て記傳十五七十三丁ハ此山を霧山とも霧島山とも云て
東西二峯有り傳云伊邪那岐伊邪那美命天浮橋の上
より霧の海を見下し給ふ島の如く見ゆる物有を
天沼矛を以て搖探り其處ハ天降給ひて其矛を逆様
ハ下し給へるなり霧島山と云も此由なりと云ある
ハ此迹く藝余の御古事を彼二柱神の御事ハ混へた
る傳なる可し偖此山常ハ詣る人多きを暴ハ霧ハ起
りて大風吹出地動ろき驚ろき音して闇夜の如く
暗がりて路も見え別め計ハ成る事有て左右も為れ
バ此霧ハ覆ふ風ハ吹放れて亡ある者も有ゆ然る

ハ神代の故実なりて謂ゆる先達ある者人ハ教へて
手毎ハ稲穂を持せ行て若此霧起りぬれバ其を以て
拂ひつゝ行けバ暫時が間ハ天明りて事故無しとぞ
取要なる有り其旧杵郡ある高千穂と云ハ却りて其事無
して此霧島山ハ正しく其所為を傳へて正しく驗を
見る事右の風土記の故事ハ襲之高千穂峯ある証此
計り慥ある事ハ有べうゝず翁も已く此事ハ心著れ
なゝましうバ御天降の處ハ旧杵郡ある〳〵ざる事ハ思
定めて後生の非ハ受ざるましを甚惜〳〵き事なり
けり但ニ柱御祖神の此霧島山ハ由無しとハ云べう
らず大同美聚方五十五ハ日月藥日向国諸縣郡

霧島神社傳方元者伊奘諾尊傳方云と有て西霧島宮の相殿の左右に柱御祖神御在し坐し東霧島宮ハ奉祀伊弉諾尊の坐し霧島岑神社ハ奉祀二柱御祖神ありと云り但逆矛の事ハ田知紀説に日向の伊東氏の此地を領せし頃建立せしとも云り変て彼峯に上りて其矛の狀を見に逆様に立たる者に非ず眞ハ言家に云ふ三鈷と云物の狀ありしが突上の時に折れ損いれて今ハ柄のみ立るありけりと云れば神代に係て云べき物に非ず

有二土蜘蛛一ハ風土記の狀に正史に

ハ多く有国神と云事を然云れば此ハ姑く字を離れて国神と見べし大鉗小鉗ハ大神小神と云事なり偖右の人物失道と云ハ虚空より降坐る天路を云なれば国神の其所に出べくも非ず故思ふに傳三十百丁

日茂君條に注るが如く天孫降臨以前に大神と云ハ大

已貴神を申し唯に神と云ハ事代主神を申せる定の如くに有ければ何れにても神と云ひ申し鴨と聞ゆるハ事代主神の御事なるを此御天降の啓行仕奉らせ給ハむと為て天八衢に出迎へ奉らせ給へる彼猿田彦神ハ正しく其事代主神に渡らせ給へれば大鉗をば姑く其神と見る可し偖地神本紀に事代主神兄天日方奇日方命亦名阿田都久志尼命此命要日向賀年度美良姫と有て此に大に由有なり其亦名の阿田ハ和名抄に薩摩国阿多郡阿多郷有り然るに此正書に下に注せるが如く到二於吾田長屋笠狭之碕一其地有二一人一自号二事勝国勝長狭一と有る此

神の事を常西一書に伊弉諾尊之子也と有を知あゞ
〻口訣に長狹者岐神也と云に受る所有て猿田彦
神と為るあり然る時に小鉗に其吾田都久志屋命に
て此御父子共に其吾田の地を皇御孫尊に奉りて退
給ひしあり其時猿田彦神に伊勢に御在し坐し其子
の吾田都久志屋命に旧杵郡に退くせ給ひしゆや和
名抄に旧杵郡に智保郷英多郷相並べる事証と為べ
し然して平家物語源平盛衰記等に祖母岳明神の事
を云事崇神天皇十年御紀に謂ゆる三輪の故政事に似
たりけるに全く右の事代主神の御末の大神朝臣に

是即高知尾明神也と云るハ其高千穂の神をバ大神氏の祖と云傳へて有しあり古より大神氏代〻豊後国大野郡の大領力りしが其祖母岳の神の子と云ふ大神惟基の子惟盛旧杵郡に移り其末子政季高知尾五郎と云れバ高知尾明神と云に全く瓊〻杵尊にあるに同じ

緒方氏有が其事に係て傳たれし者あゞ〻其神の事
跡に就て此の一に証あるに可し大友興廃記に桓武
天皇御時堀川大納言某吉方荘日野小田名宇田村に
配流有し其女に祖母岳の神通ひ弘仁二辛卯年三月
十日に男子出生す是大神朝臣惟基なり云ふと云る
あゞ〻に此に大神氏の住む所以も其祖
神に由有に為に思しきも亦証に取べきあり斯れ
に大鉗小鉗に土蜘蛛あゞ賤しき者に非て正しき
国神にして猿田彦神御父子の御事あるを其故事に
霧島に在て神に此に住せるに依て襲之高千穂峯の

（其地ハ杵郡高千穂荘の東の猿伏山と云有て土人猿田彦神の隠給ひし山なりと云て古より樵夫も敢て入る事を許さず麓なりとも犯す時ハ忽ち祟を受くと云て畏む事なり）

事を此に在し事の如く其地にて傳へたりし者あるにこそ

此大鉗小鉗と云ふ神の正しき先に立る事ハ其故事の正偽を定る階梯なりけれバ麁略にしていい終に晩る世勿らむ者ぞ能く辨ふ可き事なり

以御手投稲千穂云々ハ其末天降り著さゞりし以前の事なりけれバ天上より携へ御在し坐けるか斟庭の穂にぞ有べき是霧島山中に今も自然生の陸稲有る始なり（国人の通人云を聞くに）人田知紀説に其自然生の稲を不蒔稲と云て此霧島山中叢の中などに自然生の稲産る事有り皆陸稲なり今俗に霧島稗などハ此峯より出し者なりと云る事なりて全く実に事大なりと云る

（今に至り不蒔稲と云て此霧島山中叢の中などに自然生の稲産る事有り皆陸稲なり今俗に霧島稗などハ此峯より出し者なりと云る）

而も飫霧島山の故事あるを知べき なり又其結文に即天開晴日月照光因曰高千穂二上峯と有も心得ず其搓千穂稲の事に依て高千穂とハ云べし二上と云ハ雌山雄山相對立るに云称なるに其地圖を見又諸書に考るに更に然る名称に合るハ非るを以ていい二上ハ襲之高千穂峯に限りたる事なるを知べし白尾国柱ぞ言に彼杵郡なる高千穂の方ハ夫々の名てゝ設たれ其山無下に凡山にして更に霧島の霊山なるゝ同日に論つゝふ可きに非ず然るに先五箇所材々云所に祖母嶽々云有り其次なるを黒山嶽と云ひ其遠を天狗嶽僧房山と唱へ其次なるを嵐峯と云ひ又筒嶽とも云ふ其下を鏡鼻其次ハ同郡三田井村に爰に捷觸嶽又速日峯と云有り其次なるを烏帽子

嶽其次あるを四王子峯高天原などゝ云ふ美みも穂觸峯と云有り其次ハ同郡押方村と云ひて美を日本第一の舊跡二上峯と称し二神明神社を祀ふ如此連れる層巒共皆小ゝて巒立たるゆへ一も高嶽〳〵き峯山ハ見えず況て同じ所ゆ穂觸と云も両所ゆ在て又二上峯など別所ゆ分ち云称ふ事全後世偽称の証ゆして殊更其地僻隘士人水田無く唯粟麻を植て生活を成せり偖此他ゆ伊弉諾尊誕生の窟瓊杵尊天くだり出見尊の山陵など云傳へしが有ハ弥云ゆも足ざる者ありこれハ已殊更ゆ彼地ゆ見ゆ物為て初て其山丘巒の如

きゆき茂山(シゲヤマ)あるゆ驚きて決く古の高千穂峯ゆ非る事を見得つるあり」と云るハ然る言なる可し(天保十四年ゆ)伊勢国なる或者ゆ此ゆ次てハ播東逸が北窓鎖談ゆ著ゆたる書ゆ云く日向国高千穂山と云ハ彼国ゆ二處有り一ハ霧島山を云ひ又一ハ高千穂と云ふあり肥後より日向ゆ越る道と余考るゆ神代より云所の高千穂峯ハ今の霧島あり諸書ゆ多く霧島ゆ非ずと云へども是ハ彼地ゆ至ゑ〻すして臆断する故あり(中略)今の霧島山ハ東西ゆ峯有て相對す此山九州第一の高山ゆして他山の比す可きゆ非ず今高千穂と云山ハ衆山の中ゆ在て

是と秀たる山に非ず殊に二峯有る所にも非ず彼地に至り見む人は高千穂の霧島なる事は論を待ずして知べし」と云に誰か心にも諾はざる所は一に有りけり天保の頃伊勢国なる或者の書る西海雑志に日向国高千穂荘は西方肥後国の鶴町に接す荘隣り南は那須山に続き北方は竹田の山中に接す荘内十八里四方にして村邑僅に十七村各山の半腹又は谷間に一二軒づゝ住居を為し隣家と遥に隔て向ひと呼ぶも谷川を中に置て僻地と云ども三四町を隔て向ひと呼ぶも又他に桑多うゝめ辺土なる山中田無く畑のみにて南蠻黍計を作り麥は少う軒下の畑地に殖て年中の食物は其黍にて麥は祝日又式日なるゝて食する事無し延岡領にて高三千八百石なれども麻稚茸なゝと云名の有るゝ高千穂にて貢に入へき物も非ずと云り高千穂にあゝ米一粒をだに作出ぬ地なるにても神代の眞の高千穂なるゝめ事は然れば旧杵郡に高千穂の名有

は此は天神御子を奉迎に参向られし大鉏小鉏二神の在處なるが其故に後に其御天降の御事も此と云ふ異説も出来其に就ては高千穂とも云ひ略さては智鋪とも云事に成れども其を以て漫に御天降の地とは定むまじうりける由有り又和名抄に肥後国阿蘇郡知保郷有り此も隣國と云ひ高千穂神の事に縁有る神の住れたる事左の旧杵郡なると同じ趣なるに因れるなるゝめぞ起るまじき地名なるに就ても天孫降臨の地由緒は有べし其地とは云べゝざるを知べし右に引る襲山考に建久八年圖田帳に高千

尾社文保元年文書ハ高知尾荘ト有シ由ヲ載セ和名抄ハ智保ノ郷名有ヲ摠国風土記ハ旧杵郡高千穂郷此地即有高千穂峯皇孫神始此国天降之所也高千穂者貴豊富之辞也土地中肥民用不少云々ト有れども其ハ高千穂ト云名ハ依て襲之高千穂峯の故事を以て此の事ト為るのミ又高千穂ハ天千穂ト云むが如く天上の斎庭の稲穂を散し給へるハ起れる名ハて う有けれ豊富の義を取れるハ非ず土地中肥民用不少ト有れども民用ハ最重き稲穀の成出さるハ瘠地ト云者なるすや其上児湯郡ハ喜理島郷又末理島郷ト云者二有る事を載たり此も諸縣郡贈於郡ハ亘れる眞の高千穂の霧島の地名をしも其近きて取て神代の故事を引附むと為る好事の者の手ハ始れり ト為べし又石ハ速日峯ト云名有ハ同記ハ旧杵郡速日郷此處有山言速日峯往昔日神御孫瓊々杵尊兄饒速日命到坐此山峯故云速日ト有る是ハ此辺ハ凡て天孫降臨の御事ハ係云ふ地なるハ饒速日命の御事ヲ云ふ愈以て偽ある事知るる此命の後ハ天降ら せ給へるハ河内国ハころ有けれ何ぞ此ハ故事を傳云事の有べきハハ又高日郷高日都者日都之号也皇孫

御神始宮居之地故曰二日高一と有ハ右ハ云る高天原ハ
ぞ云ハ當たる說あるらめど釈ハ引る古風土記ハ宮崎
郡高日村昔時自天降神以御劔柄置於此地因曰劔柄
村後人改曰高日村と見え大同类聚方卅七ハ日高見
藥日向国宮崎郡島延氣早之家之方と有て高日又日
高の地名ハ宮城崎郡ハ在を竊に皇御孫尊ハ宮都ハ
り一由ハ扛撰せる者あり又臼杵郡の說ハ古老傳云
往昔於此所神等集居始堀地為臼以杵木枝為杵故云
臼杵と有る如きハ然も有べき事あゞ高千穂御連
日郷高曽郷等ハ和名抄ハも合ず悉ハ後人の襲之高

国立公文書館
National Archives of Japan